



# 堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

令和2年9月 第6号

校長 阿久津 光生

〒114-0004

東京都北区堀船 2-23-20

Tel 03-3911-8817

## <8月24日(月)一学期後半がスタート>

8月24日(月)一学期後半がスタートしました。感染症防止対策のため、放送にて行った朝礼の校長あいさつの内容を掲載したいと思います。

「例年とは異なり8月1日から昨日23日までと短い夏休み期間でした。生徒のみなさんも、夏休みの宿題等もあり大変だったと思います。また、家族でお盆の帰省や旅行も自粛されたり、行楽を楽しむ機会もほとんどなかったのではないのでしょうか。新型コロナウイルス感染症が拡大する中、さらに猛暑が続き、東京都では熱中症警戒アラートが何度も発令されました。運動や部活動、外出までも制限されました。まさに特別な夏でした。

今日から一学期の後半が始まります。残暑もまだまだ厳しく、熱中症予防と新型コロナウイルス感染症予防の両方の対策を、今まで以上にしていかなければなりません。

また、今後の学校の行事等についても、状況によって変更していかなければならない場合もあります。夏休み直前には、北区公立中学校全校で修学旅行の中止が決定し、3年生には辛い報告をしなければならませんでした。中学校生活最後の年に、部活動もほとんどできないまま、せめて修学旅行だけでも行かせてあげたいと誰もが願っていましたが、本当に気の毒でありませんでした。

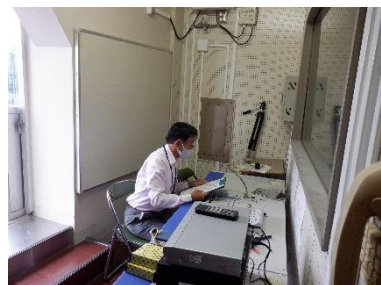
このようなコロナ禍の中、元の穏やかな生活に早く戻ることを願うと同時に、この現実を受け止めて、新しい生活スタイルを身に付けていかなければならない時が来ていると、私は改めて感じています。

今我々にとって大切なことは、主に2つあると思います。

1つは、自分の目標に向かってスモールステップで精一杯頑張ることです。どんな逆境でも、ピンチをチャンスに変えるという思いを持って、焦らずコツコツと努力していけば、目標に必ず到達することができます。前を向いて進んでいきましょう。

もう1つは、ソーシャルディスタンスの確保やリモート作業により、距離が離れても、他人を思いやる心や助け合う気持ちをしっかりと持ち続けることです。我々人間は、予測できない不安な状況になると、自分のことばかり考えて、他人の痛みや苦しみまで理解できず、誹謗・中傷したりしてしまふことがあります。しかし、こんな予測困難な状況だからこそ、互いに信頼し合い、協力しあっていかなければならないと私は思います。

どうかこれから、今まで以上に、他人に優しく、自分に厳しく生きることで、共に助け合い、分かり合える、そんな温かい学校を、生徒の皆さんと教職員一同で力を合わせてつくりあげていきましょう。」



## <8月20日(木)漢字検定が行われました。>

8月20日(木)午前9時から漢字検定が2年生の教室を使って行われました。受験されたみなさんは、大変暑い中朝から登校して、一生懸命検定試験に取り組んでいました。各級の合否発表は、9月の後半になる予定です。みなさん全員が合格することを祈っております。検定試験おつかれさまでした。



# 古河市兵衛と渋沢栄一

飛鳥山の旧渋沢邸の近くに旧古河邸があります。この旧古河邸は、旧古河財閥の創業者である古河市兵衛の邸宅です。近くにすむ市兵衛と栄一には、いったいどんな関係があるのでしょうか？

市兵衛は、1832年（天保3年）京都岡崎村で木村長右衛門と母みよの次男として生まれました。生家は酒屋で代々庄屋でした。幼名は、巳之助。市兵衛が生まれたころには、生家は没落しており、豆腐の行商をするなど貧しい生活を送っていました。27歳の時、京都の豪商・小野組で番頭をつとめていた古河太郎左衛門の養子になって、古河市兵衛を名乗るようになりました。小野組では、市兵衛は生糸の輸出、米穀や蚕卵紙の取引などで商才を発揮して多大なる貢献をしていました。明治7年（1874）から、東北の阿仁・院内の鉱山経営は小野組が一手に行うことになり、市兵衛はその責任者となったのです。ところが、明治政府の突如の経済政策の変更によって、小野組は経営破綻をしてしまいました。その時のことが、「渋沢栄一伝」（現代語訳）に記されています。

「古河市兵衛という実力者がいて、生糸、鉱山、種紙、米といった商売をやるという。小野組と古河市兵衛の両方に対して第一銀行はかなり融資をしていた。ところが、金融が逼迫してきて、借金の担保もなくなり、ついに支払い停止。小野組が潰れば、第一銀行まで潰れてしまう。私のもとを訪ねて来て古河市兵衛はこう言った。『小野組が閉鎖するために、あなたにご迷惑をかけ、せっかく創設した第一銀行を潰すことがあっては、申し訳ない。私の方にある財産を糸でも米でもことごとく差し出すから、すぐに正当な手続きをしてください』と。そして、倉庫の米、生糸など、さらに自分の給金や貯金も全て抵当を提出したおかげで、第一銀行には大した損失が出なかった。いかにも男らしい立派な措置。勇氣ある人でなければできないことであり、私も深く感心した。」



古河市兵衛（古河機械金属提供）

財産整理の結果、銀行としての損失は巨額にならずに済みました。

小野組の本家は潰れましたが、栄一の資本提供もあり、市兵衛は、明治8年に鉱山経営に着手し再起しました。これが古河鉱業（現・古河機械金属）の創業であり、古河グループの創始となったのです。

明治10年、市兵衛は、自身の運命に光と影をもたらすことになる足尾銅山（栃木県）購入を決断します。周囲は大反対でした。江戸時代に掘りつくしたといわれていたからです。しかし、市兵衛は、坑道を開発し、トロッコを走らせ、照明は油でとり、蒸気ポンプを使い、電話を設置し、電気による製銅法を用い、水力発電所もつくるなど、新技術を駆使して、豊かな鉱脈を再発見し、大量の銅を産出しました。銅は70%以上海外に輸出され市兵衛は莫大な富を獲得します。

しかし市兵衛は、やがて未曾有の事件の渦中の人物となります。足尾銅毒事件です。明治15年頃から、渡良瀬川の魚が減ったとか、田畑の実りが悪くなったといった苦情が出ていました。銅毒の被害は加速し、周囲の農民が抗議におしかけ、警官が出動する騒ぎも起こります。明治24年、衆議院議員田中正造が国会で足尾銅山の銅毒を弾劾する演説を行い、終生この弾劾をし続けます。明治30年には、田中は足尾銅山操業停止請願運動を起こします。このことは、市兵衛の生涯に影を落とし続けましたが、当時の世界の先端技術を取り入れ、日本有数の大企業を作りあげたのも事実です。市兵衛は陸奥宗光の子供、潤吉を養子にし2代目としますが、潤吉は若くして亡くなり、実の男児は三代目の虎之助のみでした。

虎之助は、北海道大学と東北大学と九州大学と三つの国立大学創立に多大な資金提供をしています。北海道大学の古河記念講堂は有名です。現在、旧古河邸に建つ立派な洋館は、1917年に古河虎之助の本邸として、鹿鳴館の設計者としても有名なジョサイアコンドルに依頼し、陸奥宗光邸跡地に建てられたものです。1923年に起こった関東大震災の際には、自宅建物に被害がなかったため、邸内を開放し、都心や下町から押し寄せた避難者約2000人を受け入れ、医療団に負傷者の治療に当たらせました。また、バラック住居86戸を建てて避難者524人を収容するなど、虎之助は大災害で傷ついた多くの人々を助けました。



旧古河邸（大谷美術館提供）

市兵衛死後、古河鉱業は多角化経営に移ります。主なところで、古河機械金属（旧古河鉱業）、古河電気工業、富士電機、富士通、日本軽金属ホールディングス、日本ゼオン、ADEKA（旧旭電化工業）、横浜ゴム、朝日生命、みずほフィナンシャルグループなどです。

この文章をつくっている私のPCも、富士通です。富士（フジ）は古河がドイツの企業ジーメンスと技術提携した時、フルカワの「フ」とジーメンスの「ジ」を取り合わせて作った商標です。市兵衛の功績は名前を変えながら、今も生き続けているのです。

渋沢栄一と古河市兵衛が盟友として互いに助け合い、協力し合ったことで、現在の日本の経済があることを改めて垣間見ることができました。

